

## 令和7年度 自己評価計画書（中間）

石川県立輪島高等学校

## 1 学びがあり進路実現できる学校

重 点 目 標	具 体 的 取 組	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定	成 果・課 題・改 善 策
① 生徒が集中して学習に取り組める環境を整備し、個々のライフプランに応じた適切な指導を行う。	*大学模擬授業や学校説明会の実施	大学模擬授業や学校説明会が自分の進路決定に役に立ったと感じた生徒の割合が  A : 90 %以上 B : 80 %以上 C : 70 %以上 D : 70 %未満	C (77%)	成 果：1学期は2、3年ビジネスコースの生徒を対象の進路ガイダンスを実施した。大学、短大、専門学校、一部企業による説明を通し、高校卒業後の進路について考えを深めることができた。  課 題：希望しない学校の説明に参加する生徒がいる。  改善策：事前に企画の説明を行い、進路志望に近い学校の説明や模擬授業を受けられるよう配慮する。
② 「コア輪島」「夢道場」などの自主学習活動を通して、生徒が主体的かつ発展的に学ぶ姿勢を育成する。	*コア輪島、生徒間の学び *スタサポの振り返り *模試の分析	模擬試験で英語総合の平均点偏差値が50を超えることができた割合が  A : 30 %以上 B : 25 %以上 C : 20 %以上 D : 20 %未満	B (28%)	現 状：7月進研模試において偏差値50を超えた生徒は  1年生 61名中 8名 (13%) 2年生 61名中 25名 (41%) 3年生 44名中 14名 (32%)  全学年で28%となっている。
③ 教員の授業力を高め、教科横断的な授業を取り入れ、3年間を見通した組織的な教科指導と進路指導の実践を図る。	*STEAM校内研修 *探究型学習の授業研究(オンデマンド研修も活用) *相互授業参観 *教科横断型授業の実施	教科横断型授業を実施し、その研究や改善のための取組や振り返りの会に参加した教員の割合が  A : 70 %以上 B : 50 %以上 C : 30 %以上 D : 30 %未満	B (61%)	成 果：STEAM校内研修を行った。また校外研修に参加した教職員がいる。教科横断型授業が行われ始めている。  課 題：教科横断型授業の実施回数が少なく、行う教職員が少ない。  改善策：探究型学習の授業研究を進める。学びウィーク中に教科横断型授業の実施、相互授業参観を促す。

2 地域と共に人間力を向上できる学校				
重 点 目 標	具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	判 定	成 果・課題・改善策
① 部活動については、生徒教職員自ら活動場所や活動内容に創意工夫を加え実施するとともに、再編や地域展開も推進する。	* 部活動、ボランティア * 球技大会、文化祭	部活動や学校行事が自己効力感を高めるための取組により、自身の主体性が高まったと感じる生徒の割合が  A : 80%以上 B : 70%以上 C : 50%以上 D : 50%未満	A (92%)	成 果：活動場所が制限される中、創意工夫して最大限できることを実行した。球技大会では、準備から運営までを生徒会役員で行うことができた。  課 題：活動場所の問題解決が今年度中には難しいため、今後も100%納得のいく行事を実施するためには相応の準備が必要である。  改善策：生徒たちの意見を可能な限り反映することで自己効力感を満たしていく方針で、行事や部活動を運営していく必要がある。
② 学校行事を通して、他者を思いやり個々の多様な価値観を理解しながらよりよい人間関係を築こうとする心を育成する。	* 防犯教室 * エンカウンターによる人間関係づくり * 学年集会	スマートフォン等によるインターネットトラブルやSNSの使い方に対する安全・予防対策を行っている生徒の割合が  A : 100% B : 90%以上 C : 80%以上 D : 80%未満	B (94%)	成 果：1年生にはスクールカウンセラーによるエンカウンターを行い、自己と他者を尊重する意識を高めることができた。  課 題：様々な事例を自分事としてとらえるまでは至らず、SNSの利用法については今後も継続的な注意喚起が必要である。  改善策：定期的に防犯教室や学年集会等を通して、注意喚起や事例紹介を行っていくことで生徒の意識を高いまま継続することができると考えている。
③ 「ふるさと創生」に特化した「街ブロ」を外部機関と連携しながら充実させ、地域貢献意識の向上と未来を創造し変える力の育成を図る。	* WAJI 活 * 輪高生による街づくりプロジェクト * 課題解決型学習	「WAJI 活」や国際交流に主体的に取り組むことで、自分の創造性を高めることができたと考える生徒の割合がPISA調査との比較において  A : 世界ベスト10 B : 世界平均以上 C : 日本平均以上 D : 日本平均未満	相対評価 のため 現時点では 判定不能	成 果：生徒アンケート結果では肯定的評価81.9%であった。特に「WAJI 活」のグループ別探究が佳境に入っている2年生は89.0%と最も高かった。  課 題：外部機関との連携をより有効なものとし、有意義な取組を一過性で終わらせず継続してさらに創造性を深めていかなければならぬ。  改善策：探究初期の1年生のA評価が26.7%と低かった。2年生の探究内容の引き継ぎがよりスムーズに行われるよう工夫したり、A Iの有効活用により、創造性深化に繋がる課題設定を支援する。

2 地域と共に人間力を向上できる学校				
重 点 目 標	具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	判 定	成 果・課題・改善策
④ 小中学校との生徒間交流事業や教員研修、各種団体との連携を通して「オール輪島」で生徒を育てる。	*相互授業参観 *教科間交流	校種間での相互授業参観や教科間交流等に参加した教員が  A : 90%以上 B : 70%以上 C : 50%以上 D : 50%未満	A (96%)	成 果：合同6小学校の指導主事計画訪問の際には、ほとんどの本校教員が小学校の授業を参観できた。  課 題：本校の校内研修を小中学校へ案内したが、小中学校の研修が重なり参加してもらえなかった。  改善策：本校で2学期に行われる研究授業を小中学校に案内するとともに参加者からコメントをもらい授業改善に活かす。
⑤ 地域教育の中核を担う学校として、被災経験から得た経験と知識をいかして、防災意識の向上や防災教育の推進に努める。	*防災教育 *危機管理	防災避難訓練を通じて、防災についての意識が高まったという生徒の割合が  A : 80%以上 B : 70%以上 C : 50%以上 D : 50%未満	A (91%)	成 果：5月実施の火災避難訓練は、実施時間を生徒・教職員に知らせずに実施した。それにより、生徒の行動や教職員の危機対応力の育成にもつながった。  課 題：生徒の中にはPTSDを抱えている者もあり、潜在的な生徒を含めると相当数になると想定している。  改善策：相談課との連携を密にし、当該生徒の意見を尊重しながら、実施形態や参加の可否を検討する。さらに避難の成功体験を重ねることで、自信や心の安定に繋がると考えている。

3 多忙化改善を積極的に実現できる学校				
重 点 目 標	具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	判 定	成 果・課題・改善策
① 生徒、教職員ともにセルフマネジメントに対する知識や意識を高め、新しい時代に対応できる行動力の向上に努める。	*行事の精選・省力化 *定時退校日の設定 *主任等ミーティング	時間外勤務時間が、一ヶ月当たり45時間以下の教員の割合が  A : 70%以上 B : 50%以上 C : 40%以上 D : 40%未満	D (37%)	成 果：毎月時間外勤務時間の集計結果を教員に対して公表した。時間外勤務時間45時間以下の教員割合は、4月32.3%、5月38.7%、6月35.5%、7月41.9%で5月のみ前年度より増やすことができた。  課 題：定時退校日や学校閉庁日が設定された背景やねらいを認識できていない教員がいる。  改善策：定時退校日における生徒の完全下校時刻を繰り上げるなど教員が退校しやすい環境を整える。
	*先生方との情報共有 *SC、専門機関との連携 *ストレスチェックの実施、分析 *職員研修	「学校の中に相談できる人がいるか」という質問で「いる」と回答した生徒の割合が  A : 50%以上 B : 40%以上 C : 30%以上 D : 30%未満	A (73%)	成 果：ストレスチェックの結果を先生方が隨時確認できるように共有することに加え、スクールカウンセラーの分析結果を各担任にも共有し、教員側からも生徒にアプローチすることができた。  課 題：心配な生徒に関する情報共有はできたが、どのように声掛けを行うかについて体系立てることができていない。  改善策：職員研修やカウンセラーだよりを通して教員のスキルアップを行い、生徒との関係づくりを支援する。
	*毎朝の登校指導 *挨拶運動 *チャイムの停止	生徒の不注意による遅刻「0」の日数が年間を通して  A : 130日以上 B : 120日以上 C : 110日以上 D : 110日未満	A 176日相当 (88%) ※1年間換算	成 果：1学期終了時点で70日登校中62日達成である。  課 題：毎年2学期以降に急激に遅刻者が増加する。  改善策：9月を無遅刻強化月間に指定し、夏休みに乱れている可能性がある生活習慣を修正できるようにする。